

驚いて良いものやら、その発見に感動して良いものやら、現実的にその種の恐怖をかみしめて良いものやら……。それまで人生の中で何度となく恐ろしさを経験することがあった気はするのだが、この種の恐ろしさは初めてであった。恐怖の正体が見えない恐怖は、正体が分かる場合よりも自分自身の居場所を失ってしまう分、怖いと思った。大袈裟でなく、ナチに連行されたユダヤ人たちもこんな気持ちになったんだろうなあと考えた。

男女別は、結局ボディチェックのためだと分かった。韓国の国内線はチェックが厳しいことは聞いていた。チェックが済み、部屋から出た後、さてどちらへ行ったものか。人々はぞろぞろ右や左へ移動していく。あとの5人はどこにいるのだろうか。あちこち見回しても分からない。また会えるのだろうかとさえ思った。座席は指定してあるから飛行機に乗れば会えるはずだとは思っていても、不安なものである。背伸びしても見えるのは人々の頭ばかりで、どの頭が彼らなのか分からない。

群集からちょっと出っ張った頭があった。西村氏であった。よくみるとその周囲に知った面々があった。手を振って確認した。池本氏は近くまで探しに来てくれていた。ようやく彼らとの再会である。よく映画で、お互いに走り寄り、ひしと肩を抱き合いながら再会の感動をかみしめるという場面があるが、ああしたくなるのがよく分かる心境であった。われらがそうしたわけではないが。

ほっとして周囲を見ると、少々前方にリュックを背負ったアメリカ人らしき若者が二人いた。彼らは戸惑った様子で自分を納得させるようにつぶやいていた。“Good experience!” きっと私と同じ気分を味わったのかも知れない。

## ニューヨークで見たハンゲル文字

池 本 正 純

私が韓国を意識するようになったきっかけは、ニューヨークに留学中の体験からであった。外国に出かけたり住んだりすれば、必ず自分の国や民族のアイデンティティを考える。欧米人と日本人との違いについて思い知らされることになるのだろうとはもちろん予想していた。しかし、アメリカという国に住んで韓国と日本とのつながりをかくも考えさせられるようになろうとは夢想だにしなかった。

クィーンズに住みついた当初、私は日本人が意外に多いのに驚いた。寿司屋の看板が街のいたるところに目につく。まず、その一軒に入ったときのことである。壁に寿司のカラー写

真付きの英語の説明板が掲げてある。いかにも日本人らしい心配りである。注文を取りに来たので私は「並」に相当するものを頼んだ。もちろん日本語で。だが返事は英語で返ってきた。「いくらアメリカの地とはいえ日本人の客に対して何も英語を使うことはないではないか。よそよそしい!」と思ったものである。

その店員が日本人でなく韓国人であるというのに気づいたのは、それからしばらくしてからであった。他の店員と韓国語で話をしたからである。「店員はともかく、カウンターの向こうで寿司を握っている職人は少くとも日本人に違いない」と踏んだが、その期待もはずれた。結局その店の中の「日本人」は客も含めてすべて韓国人であった。そして店の外の多くの「日本人」も。

その後、しばらく住んでみて、ニューヨークの食料品店の殆んどが韓国人経営であること、子供を編入させた現地の小学校で、一見日本人かと思った子供の殆んどが韓国人であったこと、そしてその傾向は、実はニューヨークに留まらず、アメリカ全土に及んでいることも次第に判ってきた。ニューヨークでハングル文字にいたるところでぶつかったその驚きもさることながら、私にとってのショックは、日本の食べ物であるはずの寿司が、韓国人によって売られていたことである。日本にラーメン屋が沢山あるというのと訳が違う。ラーメンは中国料理でも何でも無い。基本的には日本食である。しかし、寿司はいくら何でも……。要するに微妙に「愛国心」がうずくのである。ついでに言うと、現代自動車（テレビコマーシャルではヒョングと聞こえる）の名前が、本田自動車（ハングと聞こえる）の名のもじりであるなどといった変な「うわさ」をアメリカの地で中国人達がしているのを聞くと、「ひょっとして」などという妙な気持にもなってくるのである。

食べ物に話をもどそう。食べ物は微妙に文化の基底にかかわっていてもいる。最近のアメリカのサラダバーにはたいてい巻き寿司（のり巻き）がおいてある。もちろん、これは韓国人経営の影響である。この巻き寿司も、もとを正せば日本のものである。自然と私はそう考えた。安くて旨いのでよく食べた。日本で食べるのと少し違うなと感じたのは、ゴマ油の香りがしたことである。ライスに混ぜ合わせてあるらしい。しかし、いくらいじくってみても、のり巻きはのり巻きであり、アメリカでの日本食ブーム、寿司ブームにあやかった便乗商品であることに違いはない、と思った。豆腐、しょう油、化学調味料、カニかまぼこ、ポッキー、米菓、等数えだしたらきりが無いほど、韓国人経営の食料品店に行けば、日本でお馴染みの食品が、それも韓国ブランドで手に入る。日本のブランドも置いてあることがあるが、たいてい値段が高いので、我々家族は韓国ブランドを愛用した。そして、しばしば感じたことだが韓国ブランドの方がおいしい。

韓国人の作った豆腐の何とうまいことか、また韓国ブランドの「懐かしい香り」のしょう油で食べる冷やっこのうまさといったら例えようがない。私はやっこのうまさにニューヨークで開眼した。今の日本以上に本来の日本の旨さをニューヨークの韓国人が提供してくれたという訳である。

私にとって外国で暮らすことの一つの大きな不安は食生活であった。食料品一般の価格は確かに安いかもしれないが、入手可能な食料の種類が違う。ニューヨークであれば日本食料品はあるが、日本の相場で売っているため値段はべらぼうに高い。とても私の所得レベルでは無理である。そのような状況で、周りに韓国人経営の食料品店が沢山あったことは大変助かった。アメリカの普通のスーパーマーケットに行くのよりはるかに心が落ち着くのである。いや正確には胃の腑が落ち着くのである。日本人にとっては何となく懐かしくなるような商品がそこここに一杯ある。キムチさえ「他人」に見えない。「親戚のおばさん」に会った気分である。ニューヨークでの韓国との出会いはそれほど有難かった。

しかし、いくつかのものについては心の奥のどこかに「本当はこれは日本のものなのになあ」というこだわりがあったことも事実である。だが、次第に月日が経つに従って、そのこだわりには根拠がないのではないかという疑問が次第に私の内部に膨らみ始めてきた。

のり巻きはもともと韓国のものであったのではないのか、それが日本に伝えられただけなのでは？ アメリカで売っている韓国ブランドのしょう油はキッコマンのまねではなく、韓国しょう油の方が歴史が古いのかも。よく考えて見れば豆腐も、……。

これらの疑問を抱きつつ、私は留学の期を終えた。留学中にちょっとしたブームにもなっていて気になっていた万葉集と韓国語とのかかわりにについても、関連のいくつかの本を読んでみて、私の先の疑問はいっそう深まっていった。

あれほど異質に思っていた韓国語が、よくながめてみると日本語に極めて類似していることに気がついてからはなおさらである。勝手に「日本特有の」と思っていたことが、実は韓国から受け継いだもの（あるいは共通のもの）かも知れないとなると、日本のアンデンティティが微妙に揺らぎ始める。これは、一度韓国に行ってみる必要があるなど、内心思い始めていた。今回の社研の企画を思いついたのはその矢先であった。私にとって工場見学は後から付け足した大義名分である。もちろん、短い旅行を経たからといって先に述べたような疑問に結論が出る保証はない。旅行中、毎日のように焼き肉を食べては、「これは日本と違うな」と思い、裏通りの屋台店でよもぎ餅や天ぷらを見つけて食べては、「いやまったく同じだ」と思う。港町の市場で、にし（小さな巻貝）を売っているのを見て「瀬戸内と同じだ」と驚き、露店で豚の頭をそのまま蒸して並べて売っているのを見て「ちょっと違うな」と感じた

りもした。平目の刺身は大変うまかったが、盛りつけの仕方やわさびに少し違和感が残った。田舎の田園風景や復元された古い時代の民家を見ると日本と変わらないと思う反面、日本ではそこここに見られるお寺がまったく見られない。

今回の小旅行で日本のアイデンティティにかかわる疑問が解決するどころか、いよいよ訳が解からなくなってきた。ニューヨークの地下鉄で隣合わせたアメリカ人（ラテン系）が話しかけてきたことをつくづく思い起こす。「お前は韓国人か」と聞いたあと、韓国人と中国人と日本人について（彼らはこの三者をチャイニーズ・フェイスと総称する）しきりと不思議がる。「お前達は顔は区別できないぐらいに似ているのに、何故お互いにコミュニケーションできないのだ。」

あまり教養のありそうにない男の言葉だったが、非常にもっともなことだと思った。「似ているようで違う」ということを正しく認識することは実は大変むずかしい。外国に住む多くの日本人が日本の方を向いて生活しているのとはまるで異なり、韓国人達はじつにたくましくアメリカの地に根づいていることに、在米中驚嘆した。一体、何が違うのか。「最も近い外国」を正しく認識できないうちは、日本の国際化もまだまだだなどあらためて反省させられる今日この頃である。

#### IV 韓国企業調査団参加者名簿

麻島昭一（団長：経営・社研所長）、櫻井通晴（副団長：経営・経営研所長）、浅見和彦（経済）、池本正純（経営）、石塚良次（経済）、内田 弘（経済）、宇都榮子（文）、大西勝明（商）、笠原伸一郎（経営）、加藤幸三郎（経済）、加藤佑治（経済）、木幡文徳（法）、黒田彰三（経済）、柴田弘捷（文）、鈴木直次（経済）、高橋祐吉（経済・社研事務局長）、玉垣良典（経済）、殿村晋一（商）、西村 弘（経済）、二瓶 敏（経済）、平川東亜（経済）、広瀬裕子（法）、水川 侑（経済）、溝田誠吾（経営・経営研事務局長）、村上俊介（経済）、矢吹満男（経済）、米地 實（文）、儀我壮一郎（社研研究参与）、三輪芳郎（社研研究参与）、岡田和秀（経営）、横森豊雄（商）

